

## モデル地区の取り組み



## 根石中4丁目町内会 夜間防災訓練

### 「ハートtoハート（心と心）」を合言葉に！

#### 取り組みへの想い

- ご本人と地域の中に沢山の接点を作っていきたい
- 戸別訪問を通じて、ご自宅の防災チェック、安全対策のアドバイス、避難誘導についての具体的な方法を確認したい

#### 町内の概要

【世帯数】	67世帯、木造家屋が大半を占める
【高齢化率】	45%
【組・役員等】	組数7組、役員6名、消防団員2名
【専門職】	医師1名、ヘルパー1名、看護師2名
【災害時要援護者】	25名（内、市の登録災害時要援護者支援名簿への登録者11名）

#### 取り組みのポイント

ご本人の不安や知りたいこと、興味のあることなどを、とにかく丁寧に「聴く」という過程を大切にしました。防災だけでなく、日常のニーズも把握するつもりで話を聞いた。訪問活動を通じて、信頼関係をゆっくりと築きながら、要援護者と地域支援者の間に、心が通い合った避難支援プランとなるように心がけた。

#### 夜間防災訓練までの活動メニュー

7月～8月

災害時要援護者の把握と、戸別訪問による状況確認。防災対策の現状や災害時の不安などについて、要援護者の方に聞き取りをする。

8月9日（水）19:30～21:00

- 打ち合わせ「災害時要援護者マップの作成と、今後の進め方について」
- 参加者：総代、町福祉委員、防災役員、岡崎市福祉保健部2名、NPO法人レスキューストックヤード1名  
総代、町福祉委員、防災役員らと熱心に意見交換を重ねる



8月22日（金）19:30～21:00

● 防災勉強会「災害対策の実技・講話・映像視聴」

講 話：NPO法人レスキューストックヤード事務局長 浦野愛

● 参加者：48名

夜遅くまでの勉強会にも関わらず、子どもからお年寄りまで多くの参加があり、災害の恐ろしさと、何をすべきかを学ぶことができた。

◆ 講演のポイント

1. この地域で予測される災害

- ここ最近では集中豪雨が増加傾向にあり、近くに川のないこの町内会でも「内水氾濫（雨量が多いため、川の排水が間に合わず起こる浸水）」の危険性は十分に考えられる地域



- 切迫している東海・東南海地震が連動して発生した場合は、震度5弱以上の揺れが予測されている

2. 居住環境の安全対策の重要性

- 1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災では、6,434名の方の尊い命が失われた。うち、震災直後の約15分以内で亡くなったのは5,520名であり、そのうち83.7%は家屋の倒壊、家具の転倒などによる圧死・窒息死であった
- 最近の地震では、水やカンパンなどの食料がなくて亡くなった人はいない。とにかく命を守るための地震防災対策の最優先課題は「居住環境の安全性を高める！」ことにある
- 家の耐震診断・耐震補強、家具の転倒防止、ガラスの飛散防止などの対策が必要

3. まちの被害

- 災害後は、電気・ガス・水道などのライフラインが寸断され、食事、排泄、入浴など生活に大きな支障が出てくる。また、電話もつながりにくくなり、携帯電話は輻輳（ふくそう）現象が起こるため特につながりにくい
- まちの中では、火災、古いブロック塀・家屋の倒壊、道路の崩壊、自販機の転倒、橋げたの崩落などの被害が出るため、通行止めや交通渋滞を招き、救急車・消防車など

◆講演のポイント

の緊急車両、救援物資の運搬車、ボランティアなどの支援が届くまでに時間がかかる可能性が出てくる

#### 4. 支援の要は「地域コミュニティ」

- 阪神・淡路大震災では、救助を求めていた35,000人のうち、23%（7,900人）は自衛隊・消防隊が救助。しかし半数以上は亡くなっていた。これに対して77%（27,000人）は地域住民が救出。うち8割は生存者の救助であった
- 災害直後、いざというときに本当に頼りになるのは、近くに住んでいる「ご近所さん」

#### 5. 今までの防災対策をもう一度見直そう！

- 今までは、消火訓練、救出救護、炊き出しなど、災害後がメインの訓練メニューが主だった。しかし、過去の災害からの教訓としては、災害が起こる前の「減災」を進める訓練メニューや役割分担の必要性があげられる
- 防災マップづくり、家具転倒防止、災害時要援護者支援などを、自主防災活動メニューに取り込んでいこう！
- 今まであまり防災活動に参加することのなかった子どもや若い親たちなども、地域を守る大切な戦力になる。みんなを巻き込むために、訓練に関わりやすく楽しい内容であることが大切

#### 6. 災害時要援護者支援の必要性

- 過去の災害における主な犠牲者は、高齢者や障がい者であった。特に自力での情報収集、危険判断、移動などが困難なケースが多く、一人では逃げるのが難しい方々だった
- 「災害時要援護者」は高齢者や障がい者などの特定の人たちだけの問題ではない。家の安全対策をしていない、必要なものの備えをしていない人も、災害時に、他の人からの援護を必要とする人、「災害時要援護者予備軍」といえる。まずは、地域みんなの課題であるというところから、考えてみる必要がある

9月1日（月）19:00～21:00

- 地域支援者講習会打ち合わせ
- 参加者：総代、町福祉委員、防災役員、岡崎市社会福祉協議会ホームヘルパー2名
- 内 容：地域支援者講習会の意義と進め方の検討

9月12日（金）19:30～21:00

- 地域支援者講習会 「要援護者の避難・誘導方法について」  
講 師：岡崎市社会福祉協議会ホームヘルパー2名
- 参加者：38名
- 内 容：杖を使っている方、車椅子利用者、目の悪い方、耳の聞こえない方への避難誘導方法の実習訓練

#### ◆講演のポイント

##### 高齢者や障害者の避難誘導時の配慮

- ・声かけ（挨拶・目的・今の状況・どこに避難するかなど）をこまめに行い、常に安心感を与える

##### 避難誘導方法

- ・ご本人が普段移動している方法で行う
- ・コートやひざ掛け、靴など、適度な身支度を行う

##### 杖を使っている方の誘導

- ・移動時は麻痺側（杖を持っていない方）に立つ
- ・腰、肩、脇などを支えながら歩調を合わせて歩く

##### 車椅子での誘導

- ・車椅子に乗る、降りる、止まる時には、必ずブレーキ
- ・フットレスト（足を乗せる台）に足が乗っているか、手が車輪に触れていないかを確認する
- ・下り坂では後ろ向きで、車椅子を支えゆっくり降りる

##### 視覚障がい者の誘導

- ・介助者は杖を持っていない側に斜め半歩前に立つ
- ・介護者の肩か肘のすぐ上を軽く握ってもらう
- ・周囲の様子や行き先など、言葉による情報提供をこまめに行う

##### 担架での搬送

- ・ご本人が一番楽な体制を確保する
- ・基本的には足側を前方にして進むが、坂道や階段を上る時には、頭が前方に向くようにする
- ・介助者は普通より歩幅を狭くして、担架の振動を防ぐ



車椅子の使い方や誘導の方法を学ぶ



毛布と竹ざおで簡易担架を作り、実際に搬送



視覚障がい者への声かけや誘導の方法を学ぶ

夜間防災訓練 当日

9月28日 (日) 19:00~21:00

- 平成20年度防災訓練「災害時要援護者防災避難支援」実施
- 参加者：参加者138名（要援護者16名）

根石中4丁目町内会 夜間防災訓練  
「ハートtoハート（心と心）」を合言葉に！

訓練プログラム

18:40ごろ 地震発生！  
組長は各家庭へ連絡、支援者は要援護者と共に避難を開始



雨の中で傘をさしての車椅子の避難誘導



中学生が初めて担架での避難誘導に挑戦

19:15 避難完了。災害対策本部で安否確認（歯科総合センター駐車場）を行う



暗がりでの安否確認。  
明かりの確保が大変  
だった

19:45

避難所に避難せずに、自宅に残っている要援護者の安否確認と、避難を望まれる方の救助活動。その他の方には、飲料水・非常食配布、防災・防犯町内パトロールを行う。

同時に炊き出し訓練（カレー）も実施。



要援護者が怪我をしたと想定して、町内在住の看護師が状況確認に出向く



間口が狭く居室に担架が入れないため、玄関先まで移動介助



ハイゼックス（耐熱性の袋）による炊飯訓練



近所から水やざるなどの提供・協力を受け、おいしいカレーができた

20:20

避難解除

要援護者が帰宅する際の支援を行い、その後、町内パトロールを行う会場の片付け作業を開始

21:00

訓練終了・解散

## 訓練を終えて

### 防災役員の感想

- 中学生にも地域支援者として参加してもらった。暗い中での訓練だったが、作業がしやすいようライトで照らしてくれたり、安否確認の方法や地域の人動きをよく理解して動いてくれた
- 夜間は周囲が見えない分緊張感があり、日中以上に町民同士が協力して動こうとしていた
- 悪天候であったが、事故もなく緊張感を持ってできた
- 要援護者のお隣やご近所さんが地域支援者となっていたので、お互いに安心感があり、両者のつながりも強くなった
- 炊き出しなど、楽しい企画を取り入れることでコミュニケーションが深まった。担当になった主婦の皆さんは生き生きと取り組んで下さった

### 要援護者の感想

- 訓練が夜間だったので、日中より恐怖感や不安感が増した。でも、支援して下さいの方が知っている方ばかりだったので安心感があった
- もしも訓練じゃなかったらどうなっていたか…と改めて考えるきっかけになった
- いつも迷惑ばかりかけて生活しているので、自分が訓練に参加することでお役に立てたのがとても嬉しい
- 途中から雨がふり、寒かった。非常持ち出し袋には1週間分の薬、お茶、水、カロリーメイトなどを入れて持っていった。明かりが少ないと不安だが、周囲の皆さんが声をかけてくださり、安心できた
- 次回もまた参加したい



## 今後に向けて

- 「地域支援者の集い」などを開催し、積極的にコミュニケーションをはかりたい。アイマスクや車椅子体験などを通じて、相手の立場になって考える、行動することを深め、共有していきたい
- 情報伝達は主にトランシーバーを使って行ったが、極めて有効であった。もっと効果的に使えるような使用の手順を再検討したい
- 要援護者の中で今回参加していただけなかった方についての理由分析が必要。ご本人が誰と一緒にいると安心されるのかなど、ご本人のペースに合わせた関わりの中で見出していきたい
- 町内4箇所のアパート住まいの方への参加呼びかけと広報活動。お互いに話ができる関係づくりが必要

## 総代の言葉

今回は雨天、そして夜間と、心配が重なる訓練であった。しかし予想以上の参加で、しかも無事終わることができた。何よりの成果は、協力し合えたことである。

日頃、隣人であっても仕事等で声をかけ合えなかった方が、車椅子の方に傘をさしのべて話し合っている。「何かやることはありますか。」と申し出てくださった方が、すぐ誘導担当をして下さったり、危機感を持って対応して下さる。

後日、訓練のアフターケアとして、参加した要援護者宅を再度訪問。「ありがとうございます、ご苦労様でした。」と、町内として感謝の気持ちを伝えた。

参加された多くの方が「楽しかった。」とおっしゃられ、訓練が気分転換の場としても機能していたことが分かった。当初の目標をほぼ達成することができてよかった。

支援者はいつ要援護者になるかわからない。その意味で、要援護者の方から学ぶ、教えていただくという姿勢も必要であるとわかった。たとえば、炊き出しを終えて、「久しぶりでよく食べた。」と要援護者の方がにこやかに語られる一方、「少し硬かった。」との言葉もあり、要援護者一人ひとりに対する問題発見もできた。

思いやり、協力はこのような訓練の中で培われる。そこから弱者への地道な働きかけも可能となろう。